

『虞美人草』父の肖像画 Junko Higasa 2013.12.13

まず肖像は、ギリシャ彫刻、古代ローマの彫刻に始まり、それが絵画表現となった。写実として最も本人に近く描かれるほど価値が上がったが、それが逆に偶像崇拜になるということで衰退した。中世ヨーロッパでは、まず正面を向いた肖像画が許されたのはイエス・キリストのみ。それ故貴族など地位ある者の権力誇示のために描かれた肖像画は横を向いている。また金貨鑄造時にも横顔の方が便利であり、権力者たちは、実物を修正して美化した肖像によって自分の価値を高めようとした。

日本には8世紀頃中国から伝来したが、肖像画には魂が宿るとされ、権力表示角度で描いてその靈力に期待した。江戸時代には家系の伝統・祖先への敬慕を表し、明治には遺影として追慕の対象となった。

甲野家の場合『三年前^{ぜん}帰朝の節、父はこの一面を携えて、遥かなる海を横浜の埠頭に上った。それより以後は、欽吾が仰ぐ度に壁間に懸っている』甲野の父は渡航先で亡くなった。『見下ろすだけあって活きている』という描写から見ると、これは遺影として靈力を持って欽吾を見下ろしていることになる。

その活きている目に宿るものは遺志。父の靈は欽吾に「お前が家督を存続させよ」「自分の代理として藤尾を宗近に嫁がせよ」と語りかける。そして欽吾が家を出る決意をしてこの額を持っていこうとしたのは、靈的守護への期待と正統維持である。欽吾は父の遺志を負担に思いつつも血統を守る覚悟である。